

東方人形録

doll

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

いつもと同じ博麗神社に、人形がアリスから贈られてくる。

しかもその人形は完全自立人形で??

楽園の素敵な巫女「博麗 霊夢」と完全自立人形、「レイ」がお送りする。

不思議な生活。

目次

第1話	転生!?	1
第2話	憑依した体	5
第3話	出会い	11
第4話	完全自立人形	15
第5話	異変の始まり	21
第6話	レイの能力解明	25
第7話	おてんば氷結娘	30
第8話	遊ビマシヨ?	35
第9話	破壊の力	41
第10話	フランの痛み	49
第11話	赤い霧が晴れる時	54

第1話 転生!?

俺は普通の高校生だった。

そう……今日までは……。

「はあ……またバイトクビになった……」

俺の名前は鵜堂 綺羅（うどう きら）

高校生なのだが、今日バイトをクビになった。

「あくあ、もう10回目だぞ俺。」

そう俺はことごとく運が悪い。全部理由が強盗に入られたからという理由だ

まったくと……俺自信もあきれてくる。

そして俺がふと目をそらすと、ちょうど子供が転がったボールを追いかけていた。

その瞬間、車の盛大なクラクションが鳴り響いた。

俺はとっさに走り抜け子供のところへたどりつく、そして子供をどんつと突き飛ばした。

そして俺は車にひかれた。

意識が朦朧とする……向こうのほうで子供がないている声がする。

しかしその声はだんだんと薄れていき、俺は意識を失った。

「ほれ！おきんか!!」

？誰かの声が響く

「……………おきろ———!!!」

っ!?

「まったく…やっとおきたか。」

「誰だ？」

俺の目の前には真つ白な世界と、そこにたたずむいかにも神らしいかつこをした奴がいた。

おそらく神なんだろうが、想像していた神と似すぎて疑いたくなくなってくる

「あ！疑っておるな！まったく……これはお前の想像していた神に合わせただけじゃ！わしの姿は色々あるからな。」

なるほど……それならこうなるわけか

「落ち着いておるのお…普通ならここは何処だ！とか俺はどうなったんだ！とか慌てふ

ためくのが普通なのじゃがな」

「んー、そういやそうだったな。ここは何処だ？俺はどうなったんだ？」

「忘れてたのか!?!まったく……おかしな奴じやのう」

神は頭を抱える

すまん、よく言われるww

「まあ、いい。説明するでしょう。まあ率直に言えば、お前はわしのミスで死んだ。すまん」

サラツとひどいこといなあ。

「で?ここはあの世ってところか?」

「ま、似たようなところじゃ。あと、お前は運を全然つかっておらぬ。だから次に転生するときには激運体質がさずけられる。」

「いまサラツとிட்டが、俺は転生するのか」

「ああ、そうじゃ。ただし、転生する場所は決まっておる、東方Projectという世界じゃ。」

「ここならバイトもしなくていいしな。」

東方Project……たしかシューティングゲームだっけか?

「能力は?」

「安心しろ、チートにしておこう。ただし、転生するところなんじゃが、結構不便なんじゃよね」

神様は顔をそむけた

「?不便?」

「詳しいことはいえんからな。安心しろ、説明はしてやるから。あとその不便さを改善する術はあるからな。安心して逝って来い」

「さて、いつてこいという感じがおか……」

その瞬間俺の足元に穴があいた

「うおあああ!?!」

そして数秒遅れ、俺の体も重力に従い落ちていく

「それじゃあの、呼べばでてくるぞー。じゃあ幸運を祈る!」

そういつて親指を立てる神

「覚えてろおおお!!」

そういういながら俺の意識は落ちながら途絶えた……

第2話 憑依した体

「出来たー！」

可愛らしい、少女の声で俺は目が覚める。

そして見えたのは

金色の髪と青色の瞳。人形のような容姿の人だった。

「うん！ちゃんとできてる！」

目の前の少女は満足気にうなづく。

「あつ、鏡持つてくるから待っていて頂戴ね。まあ、人形だから動かないけど。」
少女は苦笑しながら部屋の奥へ歩いていった

まだ自分の状況をうまくつかめてない。

いったい俺は何に憑依したんだ？

おい！神！説明しろ！

「なんじゃ……うるさいの。おつ、うまく憑依できたみたいだの」

だから、俺は何に憑依したんだ？

「えつとだな、『人形』みたいじゃぞ？」

ファツ?!人形だと?だからさつきから体がうごかないのか!?

「いや、動けるはずだがの。どうやらまだちゃんと体になじんでないみたいだのお。

しばらくすると動けるはずじゃから、いまは動けない人形のフリでもしとくんじゃな」

わかったよ……それじゃあな

「まあ、がんばるんじゃな」

はいはい

そして頭の中から神の声が途絶える

「はい、鏡持ってきたわよ。どうかしら？」

俺は自分の姿を見つめる

腰まで伸びた黒い髪

鋭い青色の瞳

赤い独特な巫女服

やはり人形なんだな、この少女の腕の中にスッポリはいるほどの小ささだ

「さて、これであとは霊夢のところにつれていくだけね！」

少女はうれしげにつぶやく。れいむとは誰だろうか？

一体どこにつれていかれるのか少々不安だが、人形だし。何かされるといふことは無いだろう。

しばらくすると、玄関のほうから「アリスっ!!!」というでかい声と扉の開く盛大な音がした。

「はあ……魔理沙は静かに入るといふ考えはないのかしら？しようがないわね、ごめんね？いつてきてくれるかしら？」

？はて、自分は動けないのだがどうやっていくのだろうか？

と考えていたが、どうやら心配ないらしい。背中や手に糸が絡みつく、これで少女は私を操れるのだな。

まあ自分の意思で体が動かないのは変な感じではあるが、これが人形のあるべき姿だ。しかたない。

私はフヨフヨと宙を浮き、魔理沙とやらを迎えに行く

「おー？上海……じゃないな。新作か？」

金色の癖っ毛と

黒と白で決めたゴスロリのような衣装で決めた服を着ている少女が首をかしげる。

「この世界はかわった髪の色や服が多いなあ

「魔理沙、いつも静かに入ってきてっていつてるじゃない」

私の後ろからアリスがやってくる

「いやあ、すまんすまん。ところでこいつは？」

「絶対思っていないわね。この子？この子は今日霊夢にあげようとおもってね」

「霊夢が喜ぶとは思えんがなあ。確かに巫女服をきてるけどな」

魔理沙が私をジーっと眺める

「で？何しにきたの？」

「あ、そうだったぜ。もうすぐ宴会がはじまることをつたえにきたんだ。一緒にいこうぜ」

魔理沙がまぶしいほどの笑顔を浮かべる。どうやら私には興味をなくしたみたいだな。

まあ、動きもしない、話もしないものなんてつまらなくて当然だ。

「そうね、それじゃあいきましようか」

そういつてアリスは私を胸に抱いて飛び立つ。

アリスの胸から眺めてみるが、ここはずいぶん豊かな世界だな。

まるで江戸時代だ。

本当不思議な世界だなあ……

俺はやっていけるのだろうか？

第3話 出会い

私はアリス達と共に神社へ降り立つ
随分大きい神社だな。

ここでは沢山の人が住んでいるんだろう。
しばらく待つっていると、ここの巫女だろうか？

随分独特な巫女服を来ている少女が神社から出てきた

「あら、見慣れない人形をつれてるわね。」

「新作だもの。それに今日の用事の内容はこれだしね」

アリスが私を掲げる

「ふーん、まあ内容は中だね。宴会もう始まつてるわよ？」

すると魔理沙は焦った様子で

「それは大変だぜ！酒が全部なくなっちゃまうぜ」

それにアリス達は苦笑しながら神社の中に入っていった

神社の中では、妖怪で溢れかえっていた

私達は適当に場所をとって本題にはいる

「で?どうしたの?用事って」

「この人形を霊夢にあげようと思ってるね」

「何でそんな唐突に?私人形欲しい何ていったかしら?」

「んー、何となくかな。これは霊夢あげたほうがいい気がしたの。」

霊夢はよく解らないのか複雑そうな顔で私を受け取り小さくありがとう。と言った
それからアリス達は酒や話等をして宴会は終わりが近づいていく。

そして宴会が終わり全員が帰ったところで霊夢は私を抱えあげた

「アリスは一体何を考えているのかしらね?まあいいわ。」

そう言いながら霊夢は私を居間のタンスの上に置いた

「さて……片づけは明日でいいかな。さ、寝よーっと」

そういいながら霊夢は片づけもせず、布団をひいて寝てしまった

……しかしここは霊夢の他にだれもいないのだろうか？もしそうなら寂しすぎやしないだろうか？

そう考えているうちに私の意識はとぎれていった。

チチツ・チチツ・チチツ……

ん？朝か……私は伸びをしようとするが体がうまく動かない。

最初は驚いたが、すぐ理解した。

人形だつたんだ……

霊夢はまだ寝ているようだし……少し体を動かす練習でもしようかな。

まず手を動かしてみる。ギギギギときこちない様子で持ち上がる

これじゃあホラーの動く人形だな。

しばらく練習してみると、スムーズに動かせるようになってきた

これなら子供にびびられないだろう。

次は体全体を動かしてみる。手でコツをつかんだのでこれはうまくいった

霊夢のほうをチラッと見ると、まだ寝ているようだったから飛ぶ練習をしてみよう。

とりあえずジャンプをしてみるがそのまま着地するだけ、やはりうまくいかないよう
だ

しばらくジャンプしているとガタツという音がした。その音の方向を向いてみると

「あ……え？……人形が……」

霊夢が口を私を指さして口をパクパクさせていた

数分後

「あー、少しあわてすぎたわね。そうね、人形が動くななんてこの世界ではありえるわよね。メデイスンもそうだものね。うん、大丈夫」

ようやく落ち着いてくれたようだ

それじゃあ自己紹介タイムとするかな

第4話 完全自立人形

「まずは私からよね、私は博麗 霊夢よ。ところで……貴方しやべれるの?」

もっともな質問だ、まあ神からは生活に支障はでないようにしてくれたりしいから大丈夫だとは思うんだけどな

「ほら、霊夢っていつてみて」

霊夢にそういわれ、少しためしてみる。

「霊……夢?」

少し話にくいのが、声は出すことが出来た

「おお……本当にはなせるのね。動けるし、はなせる。完全自立人形って所かしらね」

霊夢がまじまじと私を見つめる

「それじゃあ、貴方のことを聞こうかな。名前は?」

「名前?……ない……」

私はしようじきに答えた、実際に転生前の名前をつかう訳にはいかないし、アリスからも何も名付けられていない。

「へえ〜……まさか完全自立人形とはなあ？」

「!？」

突然霊夢の背後から聞き覚えのある声があった

「やつ、昨日であつたよな」

「魔理沙だったか？」

「あ、スムーズに話せてきたじゃない。」

霊夢の後ろでは、魔女帽子のつばをつかんだ魔理沙が立っていた

「名前なかったのか？」

「ああ」

魔理沙がそそくさと霊夢の隣に座る

「それじゃあさ、私達で名前つけようぜ！」

「んー、そうね。名前がないと不便だし。」

「そうじゃあ、アリスがもうすぐ来るはずだし。霊夢ーお茶」

「まったく……あんたは食べたり飲んだりできるの？」

「ん、出来るみたいだ。別におなかすいたり、喉がかわいたりはないけど」

「そ、じゃあ用意……貴方にあう湯飲みが無いわ……」

霊夢が肩をすくめてつぶやいた

「貴方専用の湯飲み、また注文しなきゃ。」

そういいながら霊夢は台所に向かっていった

「ああいいながらお前との生活が楽しみたいだな。」

「そうか？そうみえないけど」

「いやなら嫌っていうやつさ。もうお前のことうけいれてるんだろ」

魔理沙が笑ってそう言った。何で霊夢のことをそこまで理解できているんだろうか？

よほど昔から一緒にいたのかな。

しばらくして、アリスがあわてて飛んできた

「魔理沙、用事ってどうしたの?」

「あ、きたわね」

それと同時に霊夢が3人分の湯飲みと、お酒を飲む時のおちよこをもつてきた

「おー、それなら大ききもちようどいいだろうな」

「何?何なの?」

「ああ、ほら挨拶して。あんたが挨拶するのが一番てつとり速い」

「?」

「ん、改めてかな?どうやら私は完全自立人形だったみたいだ。私をつくってくれてありがとうアリス。感謝するよ」

私が礼をして挨拶をするとアリスは驚いたように目を見開いて、そのあと花が綻ぶような笑顔を向けながら私をつかんだ

「うわあ!!まさか完全自立人形が成功するなんて!今までは半分だけだったのよ?上海だつてシャンハイとしか話せなかったのに!夢じゃないわよね?」

まさか自分の人形と話せるなんて!」

アリスは顔を喜びで赤らめて、興奮した様子で話す。

地味につかむ手が痛い。

「あのー……少し痛いのだが？」

「痛いとか、食べたり飲んだりもできるのね！私の理想とまったく同じ！」

「おい、アリス。そろそろ本題にはいりたいんだけどな」

「ああー！ごめんなさい！」

アリスがやっと私を話す。

私は歩いて霊夢の近くへ行くと、霊夢は私をもちあげて膝にのせた

「さて名前なんだけど、私ににてるからさ、レイでよくないかしら？」

「あー、レイムのレイか？」

「いいかもね。うんそれでいいじゃない」

「あんたどうせ早くレイと話たいだけでしょ」

「いや……早くないか？決定するの」

私がつつこむと

「私と似た名前は嫌？」

霊夢が上からのぞき込む

「いやじゃないけど……」

「じゃあいいじゃない。貴方はレイでいいでしょう？」

こうして私の名前はレイに決まった。

そのあとはアリスにさんざん質問されるハメになった。

ちなみに私は眠気も感じるらしい。そのあとは疲れて眠った。

そのあと霊夢にたたき起こされたけど

どうやら私の人生は退屈しなさそうだ

第5話 異変の始まり

赤い。

今日の天気はその一言につきる

「はあ……異変ね」

「異変?」

「そ、異変。幻想郷ではたまにこういう異変がおこるの。んで私が解決しなきゃならぬいわけ」

霊夢はそれを解決しなきゃならぬんだな

「というわけで、多分魔理沙ももうすぐ来ると思うからあんたはここで待つてて」

「おい、私も行くのか?」

「あたりまえでしょ? レイを置いていけるわけないしよ。それに実はあんたをとりいれたカードができちゃったし」

カードはよくわからなかったが、とにかく私もつれていかれるみたいだ

「じゃ、用意してくるわね」

そういつて出て行く霊夢

とりあえず弾幕うてないと役にはたてない。

おい、神！

「ん？久しぶりじゃの、どうした？」

とりあえず、出来ることを簡単におしえてくれないか

「そうじゃな、できることは擬人化や弾幕がうてるぞ。浮くのは少しコツがいるがな

今回は霊夢にまかせておけ、霊力を分けてもらえば霊夢の思うとおりに動けるはずじゃ」

やりかたはどうするんだ？

「んー、擬人化は自分の体に霊力がまとわりつくようなイメージでやってみるんじゃな。弾幕はその霊力を球状にするのが普通じゃが、霊夢の場合は札を使うみたいじゃな？なので霊力を札状にしてみるんじゃな。それじゃ、幸運をいのるぞい」

そういつて神は去っていった

霊夢はまだこないようだから練習してみるか

えっと体に霊力がまとわりつくようなイメージか

しばらくやっていると、細かい糸みたいなイメージのものが体にまとわりつく感じになってくる。

スツと目を開けると、視界がグンツとあがっていた

鏡を取り出しているのぞいてみると、そのまんま大きくなつた感じだな

その姿で弾幕を出すのは簡単だったが、もとの姿でいざやってみると難しい出来たとしても、安定せずとばしたとしてもすぐ消えてしまう

しばらく苦戦している

空から「おーい、レーイ！」と声がしてきた

「おーい、何してるんだ？」

と目の前に箒にのつた魔理沙がおりてきた

「ああ、弾幕の練習をしてたんだ。少しでも役にたちたいからさ」

そう魔理沙につげると、魔理沙はうむとうなずき

「よし！少し手伝ってやるぜ！どんな感じだ？今は」

魔理沙の目の前に札状の弾幕をだしてみる

「なるほど、安定しないんだな。これは霊力が札という形からはみだしてるからだぜ。だからこの札にちゃんとピツタリあわせるんだ。そうすれば安定すると思うぜ」

魔理沙にいわれたとおり、少し力を加えてみる

すると安定し、距離も飛ぶようになった。木にあててみると、木は倒れてしまった

「……あとは手加減だな。これじゃあ殺傷能力付きだ」

これは弾幕ごっこなので、危ないそうだな

しばらく魔理沙と話していると霊夢が用意してやってきた

「あら、魔理沙来てたの？ さあ、準備は出来たし。いきましようか」

さあ、異変を解決するため動き出す霊夢達

レイを取り入れたスペルカードとは何だろうか？

第6話 レイの能力解明

今は上空。

赤い霧をつきぬけていつているのだが、視界がかなり悪い。

私は陰陽玉にのせてもらっている。

霊夢曰く、私の飛行スピードにあわせられないから。とのことだ

まあ楽だからいいのだが。

しばらく飛んでいると向こうのほうから黒い闇の固まりが飛んできた

「貴方達は食べられる人間？」

などと物騒な事をいうのは、両手を広げた子供。

多分妖怪だろうがな

「それ！」

次の瞬間あたりが真っ暗になる

「なるほど、これがアイツの能力なのね」

「これが私の能力なのかー！私も何もみえないけど

ちなみにルーミアって名前があるのかー!」

それって意味があるのだろうか?

「レイ、どう? あんたは見える?」

「ん、バツチリ見える」

「へえー、私じゃ何も見えないぜ?」

どうやら私は人形だからこういうのには影響されないようだ

「じゃあどうにかしてアイツの気をそらすことはできるかしら?」

「ああ、何とかいけるだろう」

とりあえず擬人化だな

私の視界がグンっと大きくなり、今は霊夢と同じぐらいの背丈になる

「見えないけどレイの霊力は一気に跳ね上がったわよ!」

「後で説明する! とりあえず霊夢、魔理沙は少しでも明るくなればルーミアに近づいてくれ!」

そういつて私はルーミアの後ろに回り込み、わざと殺気を出して回し蹴りを放つ

ルーミアは殺気を感じ取ったのかあわててしゃがみ込む。

思った通りだ、ルーミアの気がそれた瞬間闇ははれていく。

それに霊夢達ももう弾幕を放っている………!?

私のほうにも弾幕が来てるぞ!?

あわてて横にそれで弾幕が来ないところへ逃げる。

ルーミアは一生懸命よけていたが、最終的に被弾してこの勝負は霊夢達の勝ちとなった。

その後……

「おい！危ないじゃないか！」

「しようがないじゃない、まああたらなかったのだし結果オーライってやつよ」

反省してないなコイツは……

「それよりだ、さっきの擬人化って奴はどんななんだ？」

魔理沙が興味津々の様子で聞いてくる。

しょうがない………疲れるが

そして私が発動すると霊夢と魔理沙は驚愕を顔に隠せていなかった

「この状態は戦闘とかで霊力をつかわなければ1日中はこれでいられるが

戦闘となると、もって15分だろうな」

「………それに今わかったんだけど、貴方の能力は2つあるみたいよ？」

程度の能力か

「多分一つは「影響されない程度の能力」だと思うぜ？たとえばさっきのルーミアの場合

は視界を奪う能力だが、レイにはきかないみたいだぜ」

「その他にも精神系もきかなそうね。幻術とか」

しかしもう一つはいつたい？

「うーん………また分かると思うわ。それまではよけいな事はしない方がよさそうね」
「フラグか？とところでレイはさ、霊夢の霊力をいれてるから霊力や札がつかえるんだよな？」

「そうだが……？まあ手であいてにふれると少し吸い取れたりする」

「じゃあ私の魔力をいれたらどうなるんだ？」

「あ。」

そうか、もしかしたらこれがもう一つの能力に繋がるかもしれない！

「じゃあ早速やってみるか」

私がそつと魔理沙にふれてみると

突然服が替わって、魔理沙の服装に替わっていた

ちゃんと箒にのらないとおちそうだ

「!!なるほど！お前のもう一つの能力ってのはふれた相手の能力を使えるってやつだな」

「といつても簡単なスペルしかつかえないがな」

「名付けて「着替える程度の能力ってね」

「あ、どうやら一度着替えると次から好きな時に着替えれるようだ」

実際に霊夢の服装に戻る

「霊夢の服だと普通に空が飛べるな」

「そりゃあ私の能力が「空を飛ぶ程度の能力」だもの。それが関係してるのね」

なるほど、じゃあ空を移動するときは霊夢のほうが安全なわけだ

「私の場合空を飛ぶと少し早いと思うぜ？」

魔理沙がまけじといいかえす

「まあこれで少しは戦力がついた」

そう私は胸をなで下ろすのだった

第7話 おてんば氷結娘

レイの能力がわかったところで、私達はまた飛行を開始する

「ううー、少し冷えてきたわね」

霊夢が少し体を縮めながらうめくように呟く

「にしてもいつまで続くんだ？この湖はよー」

「わからないな、霧のせいによく見えない」

赤い霧が視界をさえぎり、一体どこまでこの湖が続いているのかまったく予測がつかない

しばらく飛行を続けていると、目の前に冷気をまとった子供？が現れる

「ここは通さないよー！ここはアタイ達妖精のナワバリなんだからー！」

その氷妖精は声高らかに叫んでくるが、霊夢と魔理沙は表情ひとつかえない

「なんだよそのバカを見るような目は！！アタイは最強なんだよー！」

霊夢達が反応してくれないのがよほど悔しかったのか、顔を真っ赤にしてわめきだす

「アタつ、アタイは最強なんだぞ…」

だんだんと氷妖精は涙目になって来た・・・さすがにかわいそうになってきたので少し反応してあげることにした

「えつと、少しいいかい？」

「何よ」

氷妖精は不機嫌そうに口をとがらせて返事をする

「名前、おしえてくれないかな？」

「……チルノ」

名前はチルノというらしい。どうにか説得できそうだ

「霊夢、魔理沙、先に行っておいてくれないか？後で必ずおいつく」

「はあ、わかったわ。後で絶対追いつきなさいよ？」

霊夢と魔理沙が私達の横をとおりぬけていく

「いいのかい？通らせて」

「…いいよ。」

私がチルノにたずねると、もう通してはくれるらしい

「すまないな、霊夢達は結構冷たいからな」

「ほーんといらつく奴らだね！話しかけられたらちゃんと返事するのがマナーってもの

じゃんー」

チルノはまだ少し怒っている。よほど悔しかったんだな

「でも何でここを通さない！つていったんだ？それに妖精のなわばりなのにどうして君以外にいないんだ？」

「…皆この霧のせいでおかしくなっちゃたんだ。いつもなら一緒に遊んだりするのに皆アタイと大ちゃんに暴力を振るうんだ。だから、皆の代わりにアタイがこの遊び場を守るんだ。」

最強だから守るんだ！」

どうやらこの霧は、妖怪を凶暴化させるようだが、強い力を持つものには効果がないようだ

つまり、チルノは妖精の中でも中々の力の持ち主ってことか

「そうか、大丈夫。もうすぐこの異変は解決されるし、皆もうすぐ元に戻る。」

きつとまた皆と遊べるよ。」

私ができるかぎりやさしく言うけどチルノは「本当？」と聞き返してきたので

「ああ、本当だ。博麗の巫女はこういうのを解決するためにいるんだぞ？」

と答えると、チルノは安心したのか胸をなでおろしていた

「あ、そーだ！ねえ！アンタは名前なんていうの？」

「私か？レイ、レイ・ドールだ」

「そっか！レイってアタイより小さいのにしっかりしてるんだね」

そんな笑顔で小さいっていわれると傷ついていいのかどうなのかわからない（まあ人形だから小さいのは仕方ないんだけど）

「さて、私はそろそろ館に向かうとするよ」

「…アタイもいつていい？」

「ええ!?さすがに駄目だ！危険すぎる」

何を言いつすんだこの子は!!

いくら力をもってたって今から行くのはまだ何があるかわからない

「大丈夫！妖精は死んだって自然があるかぎり生き返れるんだ！」

でも死ぬときの恐怖や、痛みは感じるだろうに……

「でも……」

「アタイはこの異変を終わらせたい、皆でまた遊びたいんだ！」

「……」

「アタイがいつても、足手まといかもしれないけどいいんだ。」

チルノはもうてこでもついてくるんだろうなあ……

「わかった…でも危なくなったらすぐ逃げるんだ。約束だぞ」

「うん！約束！」

チルノが氷のような羽をキラキラ輝かせてうなずく
さして、急いで霊夢の所までおいつくか！

第8話 遊ビマシヨ？

チルノとともにしばらく進んでいると

赤い立派な屋敷が前方に見えてくる

ちなみに道中でコツソリチルノから少し力を吸い取り、能力をいただいておいた（服）

「ほお、結構でかいんだな」

「これ紅魔館っていうらしいよ？吸血鬼がすんでるんだって」

吸血鬼か、もしかとは思っていたがやっぱりこの世界なら実在するんだな

「でもアタイは最強だからそんなの怖くないけどね！」

胸をそらしながら、ムフーンと誇らしげなチルノ。

そういう子供のような反応は見ていて少し楽しい気がするな

ずっとさめた霊夢と一緒にだったからなあ

こういう反応は新鮮な気がするよ

「ん？」

色々考え事をしていていつのまにか門までたどりついていたらしい

少しよってみるとそこには

「お嬢様あゝ咲夜さんく申し訳ありませんく」

赤色の髪をした、おそらくこの門番だろうか？が目を回して倒れていた
少し派手にやりすぎではないか？

門の近くではクレーターがいくつもできたところから多分魔理沙だよなあ
全部終わったら、直すの手伝いにこよう……

門を飛び越えて、地面に着地する

門を開けてはいらなかったのは私とチルノじや重くてあけられないし、何より飛べば
いいのだからあける必要はない。(この世界で門はあまりつかえないような気が……)

扉まで少し距離があるが、その傍らにはおそらく悪魔の石造だろうか？がたっていた
いかにも悪魔の家って感じもするが奥のほうに花壇があった。

少しこの外見には似合わない気もするが、結構見事な咲き具合だった

ギイイイ……

扉を開けると、中も外に負けないほど真つ赤でやはり同じように争った後が見える
そして階段にはおそらくこのメイドさんだろうか？がボロボロの姿で座っていた

「あら…また侵入者かしら？」

「ま、そんなところだ」

「本当は追い払うのが私の役目なのだけれど……」

そのメイドは手すりにつかまり、立ち上がろうとするがまた座り込んでしまう

「このとおり、私は巫女にポコポコにされて動けないわ。いいわよ、通してあげる」

巫女…霊夢か。どうやら霊夢はもう結構先まで進んでしまったようだ

これは急がないといけない

私はチルノをつれて、そのまま飛行を開始しながらメイドにすまないと声をかける

「…地下にはいかないことね」

ボソツと咲夜が呟いた言葉を私は何とか聞き取ることが出来た。

一体、地下には何があるのだろうか？

「…迷った」

言葉のとおり、迷ったのである

この館はおもったより広く、同じような廊下が多い

「レイー、なんだか上るどころかだんだんおりていつてるきがするよ?」

「…気のせいだ!」

そしてまた移動を開始して30分。

みるからも怪しい扉を発見する

「なんだこれ?」

チルノがグツと扉を押すと、簡単に扉は開いた

「おお! ねえレイー! いてみようよ」

チルノがワクワクといった顔で私の手をひっぱる

「わかった、これ以外に行くところは見つからないし…行こう！」

扉の先は長い階段が延々と続いており、進むことにだんだんと薄暗くなっていく

長い階段の終わりには、牢獄のような部屋がまっていた
「何だこれは？」

私が思わず口に出して呟くと、奥のほうから声があった

「誰か……いるの？」

その声は、どうやら少女のような幼い感じの声だった

「君は誰だ？」

「私？私はフランドール・スカーレット。貴方は？」

「レイ・ドールだ」

「アタイはチルノだよー！」

チルノはニコッとご機嫌そうに返事をする

「レイにチルノかー……!!っ……逃げて……」

少しうれしそうに私達の名前を呟いていたフランという少女が突然声を荒げた
しかし、あまりにも暗いため、何がおきているかわからない

「何でっ……ウグツ……アアアアアアア……!!!」

この世のものとは思えない叫び声が聞こえたかと思うと、熱風とともに、牢屋の檻が
はじけ飛ぶ

「何!?!」

「チルノ!さがっているろ!」

とりあえずチルノを私の後ろにさがらせ、その声のほうへ視線をめぐらせる

「アハハ……ウフフ……」

無邪気な笑い声とともにあらわれたのは金色の髪とかれた木の枝のような羽にキラ
キラとした寶石のようなものをつけ、赤い炎をまとった剣を片手にもった少女だった

おそらくこの子が、先ほどの声の持ち主だろう

「レイ……チルノ……遊ビマシヨ?」

そう言つて、フランは狂気にそまつた笑顔を私達に向けたのだった……

第9話 破壊の力

「あははっさあイクヨ？」

そういうながらフランはスペルカードをとりだすが、込められた力はどう考えても弾幕ゴツコの遊びようではないだろう

「まずは、禁忌『クランベリートラップ』！」

発動とともにフランの左右には魔方阵のような物が出現する

それがあたりは動き回り、弾幕を放ってくる

「私はスペカをもっていないというのに……」

あわてて回避に専念するが、私はスペルカードを持っていないのはつきり言つて不利だ

霊夢がいれば何とかかなったかもしれないが……

「ホラホラ！頑張らないとあたっちやうよ？」

フランが楽しそうに笑いながら弾幕を放ち続ける

「くっ…」

私も弾幕を弾幕ごっこ用ではなく、殺傷能力付きでフランの弾幕を相殺させるが攻めてに欠ける

「仕方ない…」

あまりなりたくないが（疲れるから）

擬人化！

「わあ！すごいおつきくなった！」

「ふっ！」

私は瞬時にフランの背後に回り背中に思いつきり回し蹴りを放つ

「ガッ!!」

フランの小柄な体は簡単にはじけ飛んでいく

だがこんなことでおわるはずもない

「禁忌『フォーオブアカインド』」

はじけとんだ先からフランが四人出てくる

「「次は鬼ごっこね！」」

全員炎をまとった剣を片手に一気に突っ込んでくる

「今回は魔理沙のスペルを借りるとするか」

レイがそう呟くと同時に、レイの服が黒白のエプロンドレスに変わる
「箒にのるのはなれてないがな、行くぞ！恋符『マスタースパーク』！」
私がそう叫ぶと、太い光線がフランを包み込む

「やったか？」

私が呟くと同時に魔理沙の服から赤白の巫女服に変わる

「…あはは」

「!?」

「すごい！すごい！」

砂埃から出てきたのは、少し傷つきながらも笑いながら拍手をするフランだった。「私の分身在全員消えちゃった！じゃあじゃあ次はかくれんぼね！秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

するとフランの姿が目の前から消える

「なっ!?」

そのかわりフランがいた所から弾幕が放たれていく

「なるほど…だからかくれんぼってことか！」

私は擬人化から元の姿に戻り、よけることに専念するが、やはり弾幕初心者にはこれはきつすぎだ

そして被弾をしてしまう

「ガッ…」

私は人形だが無論痛みは感じる。

意識が飛ぶかと思うぐらいの痛みと私の体がギチツといやな音を出す

しかもいまの被弾のせいで動きに隙が出来てしまう

もう次の弾幕はすぐ目の前に来ているというのに!!

もう終わりだと思った瞬間だった

「氷符『アイシクルフォール』!」

氷の弾幕が私の目の前の弾幕を消していく

「レイ!大丈夫?」

下にいたチルノがいつのまにか私の近くまで来ていた

どうやら今のはチルノが放ったらしい

「ありがとう、助かった」

「いいのいいの!それよりアイツどこいったんだ?」

チルノがあたりをキョロキョロと見回す

「多分スペル時間切れをまつしかないな」

このスペルをブレイクするには時間切れしかなさそうだ

相手が見えていれば、スペルカードや相手自身を攻撃し、ブレイクすることも可能だ

が今回はそうはいかない

何せ、相手が見えないのだから

「とりあえずよければいいのね！」

「そういうことだ」

私とチルノはいったん離れて、よけることに専念する
だんだんと弾幕をよけるのにもなれてきた。

そしてついに時間切れになり、フランが姿をあらわす

「うーん、そろそろ飽きちゃった。ギョツとしてドカーン！」

フランが手のひらを前に突き出す

!? 何故か寒気がした……

「チルノ！ おっきな氷を投げろ！」

フランは手のひらをギョツと握り締めると同時にチルノは大きな氷の塊をフランに
放つ

すると中々の大きさだった氷の塊はガシャン!!? と音を立て
て砕け散る

「あー、外しちゃった！ じゃあもう一回！」

フランが手のひらを突き出し、狙いを定める。

フランの視線の先は……チルノだ!!?

「ギョツとしてドカーン！」

フランが掌をギョツとする直前に私はチルノを突き飛ばした
そして能力を発動させる

これが有効かどうかかわからないがするしかない！

ギチギチギチッ！

先ほどの攻撃より何倍もの痛みが私の体に駆け巡る

「アガッ……!!？」

体はもう悲鳴をあげていた

そして、その痛み能耐えきれず、私は意識を失い地面へ落下していく

しかしレイは地面にぶつかることなく、フランによって受け止められる
「私の能力で壊れない者、みーつけた♪」

フランは無邪気に、しかし狂気の瞳のままレイを抱きしめる

その時に、上のほうから地響きがおこる

「お姉様かな？…私も久しぶりに暴れよーつと！」

フランはレイを抱きしめたまま、羽を広げ、天井を突き破り上へと飛んでいく。それを呆然と見ていたチルノは、ハッと我に帰り、慌ててそれを追いかけた。

第10話 フランの痛み

そのころ…霊夢はというと…

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「霊符『夢想封印』！」

霊夢とレミリアの弾幕がぶつかりあい、あたりには大きな衝撃波がおこる
「うわあ、どっちもひけをとらないな」

「お嬢様はお強いですから、絶対お嬢様が勝ちます」

「何だと？ 霊夢は私がライバルと認めたんだぞ？ 簡単には勝てやしないさ」

「パチュリー様に負けた貴方がいけないでください」

「ああ？ その霊夢に負けたお前が言うな」

下では咲夜と魔理沙がどちらが勝つかについて討論していた

咲夜は霊夢に敗退、魔理沙はパチュリーに敗退していたのでどちらも見学だ
ちなみにパチュリーは喘息が出たので休んでいる

「ふーん、貴方やるわね」

「貴方こそ、人間なのに中々しぶといわね」

二人は少し疲労を顔に浮かべながら会話をするが、どちらも隙は出さず、警戒をしながら会話をしている

だが、そんな二人の真剣勝負は、突然おきた爆発でさえぎられることになる
「ぎゅつとしてえ、どかーん！」

そんな無邪気な声とともに床が爆発音とともに破壊される

「何だ何だ!?!」

「まさか…これは!」

下で待機していた咲夜と魔理沙は慌てて飛び上がる

咲夜はひどく驚き、顔を青くさせた

そしてレミリアも同じように顔をひどく真剣なものにかえた

「何がおきてるの?」

霊夢もひどく驚いた顔でレミリアと砂煙立ち込める床を交互に見る

「アハハ! やつとついた!」

そこから出てきたのは、金色の髪と不思議な羽を持った少女

どこことなくレミリアに似ている顔立ちだ

「何故…何故出てきた」

レミリアは顔を伏せて、両手をギリツと握り締める

「レミリア？」

霊夢はレミリアに呼びかけるがレミリアは反応をしない

そして次にレミリアが顔を上げて叫んだのは

「何故出てきた!!! フラン!!!」

フランドール・スカーレット、彼女の愛してやまない愛しい妹だった

「アハハ？お姉さま、久しぶりね」

フランはそんなレミリアの険悪に動じることなくうれしそうな顔でレミリアに話かける

「495年間、私はあの地下牢に閉じ込められて、人に会うことも、人と話すことも禁じられてきたわ」

フランは笑みをうかべたままレミリアに語りだした

今まで自分が何を思ってきたかを

「私の能力は破壊する能力、すべてを壊す能力だもの。だからお姉さまは私を閉じ込めた。わかってる、勿論わかってたわ」

フランは顔を少しだけゆがめた、おそらく自分ではわかっていないのだろう

「だけど…心はわかつてはくれなかったわ」

話すごとにフランの顔は醜くゆがんでいく

「寂しい、つらい、ここから出たい、そんな感情が私を蝕んだ」

「そして私はどんどん壊れていった、そしていつしか私は感情のままにすべてを破壊するようになった。人も、妖怪も、壁も、お人形も。すべて、すべて壊し続けたわ」

「……」

レミリアはそれを、体を震わせながら聞いていた

「それも今日でおしまい。だって私は壊れないおもちゃをみつけたの！

それに、私がすべて壊すもの。この私をしばる大きな牢を、この世界を」

フランはゆがんだ顔をもどし、満面の笑みをうかべ
最後にこう呟いた
「もう我慢しない、私は自由になるの！」

第11話 赤い霧が晴れる時

「…あー、水さして悪いんだけど」

霊夢がきまわずそうにフランにはなしかける

「あんたは何がしたいわけ？」

霊夢が問うと、フランは楽しそうに笑いながら

「勿論弾幕勝負！ かったら私はここからでて遊びまわるの！」

「そう、じゃあスタートね」

霊夢がそう言ったと同時に魔理沙が霊夢の横まで飛来し、八卦路を構える

「何してんのあんた」

「何って…戦いの準備だぜ？」

「そうじゃなくて、なにしにきたのよ」

「おまえ手伝いにきたんだぜ？」

霊夢はあたりまえだとも言う魔理沙に少し頭をかかえ、唸るようにため息をついた

「邪魔、しないでよ！」

「あたりまえだ！」

両者、一斉にとびまわる

「わー、二人がかり？いいよー、そっちのほうが楽しいもの」

フランが嬉しそうに霊夢達の軽いシヨットをさけながら言う

「えっと、フラン」

「なーに？霊夢」

「そんな偽物、いつまでもってるの？」

「？」

霊夢がそう言った瞬間、フランの手元のレイはばさつと音を立てて、札になり下へ落
下していく

「!?」

「やっぱり霊夢にはばれていたか」

と、どこからかレイの声がある

「あたりまえよ、ほら魔理沙も笑ってないで出なさい」

霊夢がそう言うがすと、魔理沙はくつくくと笑いながら帽子を上げる

中には座っているレイがいた

魔理沙は座っているレイを持つと、ほらよ。と言いながら霊夢に投げ渡す

霊夢は慌てることなくレイをキャッチする

「服、ポロポロじゃない：アリスにいつてまたなおしてもらいましようか」

霊夢はフウ、と一息つくくと、飛べる？と聞いてからレイをそつと離す

「いつのまに？」

フランは驚いたように、目を丸くさせていた

「フランが床をぶち抜いた時だよ、あの時私は分身といれかわり、魔理沙のところまで飛んだのさ。」

あとはバレないように魔理沙の帽子にかくれていた」

「ぶち抜いたひょうしに手が緩んだのね」

霊夢がなつとくしたように言う

「むう、じゃあ3人对1人になっちゃったね」

フランがそう言うのと

霊夢は少し笑いながら

「いいえ、多人数対一人よ」

「えっ？」

霊夢は魔理沙も見たことのないスペルカードを取り出す

「レイ、擬人化よろしく」

「了解」

そう言うとともに、レイの姿は女性のすがたにかわる

「さーて、はりきっていきましようか霊符『博麗大分身』」

霊夢がスペルを発動させると、レイと霊夢の分身があたり一面に現れていく

「おー、私一人じゃこんなにだせないわよ」

「早く攻撃しろよ…霊夢」

「わかってるって」

増えた分身からはお札や針の弾幕が、自機狙いだったり、辺り一面にはなったりと様々な弾幕が放たれる

「あわわっ」

流石のフランも、なかなか危ないよけかたをしている

「!？」

そして、突然蹴りをかましてくるやつもいるから油断はできない

フランの小さな体は簡単に吹き飛ばされる

しかし、辺り一面には霊夢とレイの分身がたくさんいるわけで、休む暇などフランにあたえない

「それじゃあ二枚目、霊符『夢想封印 檻』」

霊夢が手を掲げると、分身達は消えて、かわりに虹色に輝く光弾が現れる

そして、レイはいつもの姿にもどる

そして光弾はフランの回りを固くかため、動きを制限する

いわゆるストレスタイプ

「危ないってー!」

フランがグレイズをガリガリと稼ぎながら叫ぶ

そして、その弾幕がそれで終わるはずもない、

動きを制限されたフランの回りをレイが魔理沙のレーザーでさらに動きづらくする

そして、霊夢は

「さて、ずるいなんてのは無しよー!」

霊夢は5色のカラフルな弾幕を放つ

それは霊夢おとくいの夢想封印、しかし、今回はガチガチにかためられた状態でよければいけないのだ

「もちろん、私もずっと同じところにはなってるわけじゃない」

レイはフランの近くを乱雑にレーザーを放つ

「何か二枚のスペルカードを一度によけているみたいだな」

と、目の前に広がる普段の霊夢の弾幕より数倍はよけにくくなったであろう弾幕をみて、魔理沙は眩く

もし自分ならすぐ被弾していただろう

そうがながえると少し虚しくなったので、顔をふり、また3人の戦いの観戦にまわる

「うう……！難しすぎるよー！」

フランは服をとどころどころこがしながら必死によける

そして、ついに二人の弾幕が時間切れとなり、消滅していく

「！よーし！次は私！」

フランがスペルカードをとりだし、反撃しようとするものの

「私を忘れちゃあいけないぜ？」

「!？」

カードをもったまま魔理沙のレーザーに被弾してしまうなんて可愛そうなフランW

「うわあ・・・結構ひどいのね。魔理沙」

「そこはもう少し見せ場をやるのが普通だろうに」

「しよーがないだろ？これ以上続けたらこの館つぶれちゃうぜ」

あたりはガレキやほこりですべていっばいになり、さらに天井には綺麗な天窓ができてしまっている

そこら中がミシミシいつてるのは気のせいだ、うん

「うー☆」

レミリアはもはや考えることをやめている。それに咲夜が「はうあ！お嬢様なんと可愛らしいいいいいいい!!」とあたりを赤くそめている始末だ

「うう、負けちゃった」

ガラガラと音をたててフランは瓦礫の中から出てくる
私はフランのそばまで飛んでいき、フランの視線にあわせて止まる

「レイ・・・？」

「フラン、楽しかった？」

「・・・うん！」

フランは無邪気にはほえむ、その顔は本当にそこらと変わらない子供じみた笑顔だつた

「ねえ、フラン。自分の力は怖いかい？」

「……！」

「すべてを怖してしまう力、君は怖い？」

「……うん」

フランは羽をちからなくへにやりとまげる

「大事なものを壊してしまうかもしれないから……怖い。美鈴やパチユリー、こあや咲夜、お姉様を壊してしまうかもしれないから……怖いよ」

「フラン……」

レミリアはくるしそうな顔でフランを見つめる

「フラン、何でレミリアは君を地下へ閉じこめたと思う？」

「え……？それは……私が怖いから……私が嫌いだから……」

「!!違うっ!違うのフラン!!」

レミリアはダツと走り出し、フランの前に立つ

「私、フランの事大好きよ!忘れたことなんて一度もないわ!ずっと……ずっと貴方のことを思い続けてきた!」

レミリアはフランをギュツと抱きしめる

「ただ……私がこわかったことは……貴方が壊れてしまうこと」

「おねえ……さま？」

「自分のしてしまったことを知って、素直なフランじゃなくなっていくてしまうのが怖かった。地下に閉じこめれば貴方は傷つかない、悲しむことはない。だから冷たくつきはなし、地下へ閉じこめ、人にあうこと、外にでることを禁じた。それが貴方のためになると思って、これなら何も、誰も壊すことはないから」

レミリアはフランをだきしめたままずっと動かない

「ばっかじゃないの？」

「！」

霊夢は腕を組み、レミリアを見据える

「フランのためになるですって？閉じこめて、寂しい思いをさせることが？壊さないことがフランの幸せなわけがないでしょうが!!」

「っ！」

「フランはただあんたと一緒にいたかっただけなのよ！そばにいてほしかっただけ！

フランが誰かを！何かを！壊さないようにあんたが一緒にいればよかったじゃない！あんたそれでもお姉ちゃんなの!?そんなのフランのためじゃないわ、あんたの自己満

足よー。」

「おいつ！ 霊夢言い過ぎだ!!」

「いいの・・・そのとおりなもの」

レミリアはゆっくりとフランから離れる

「全部私の自己満足、これでフランは救われると思った私の思い違い。

だけどそんな私のわがままでフランを何100年も苦しませてしまった・・・」

「お姉様・・・」

「ごめんなさいフラン、本当にごめんなさい。ずっと側でいてあげればよかった・・・もつともつとお話してあげればよかった・・・やさしくしてあげればよかった・・・」

レミリアはフランに頭をさげて、肩をふるわせながら謝った。何度も何度も・・・

「ううん、いいのお姉様。頭を上げて?」

フランは優しくレミリアに話しかける

「それならこれからそうすればいいじゃないか」

「えっ?」

レイはレミリアの近くまで飛ぶと

「これからフランとずっと一緒にいて、うんと話して、めいっばい優しくすればいい。

今までできなかったことを、これからすればいい」

「……」

「私ね？ずつとお姉様は私のことが嫌いなんだと思ってたの。だけどお姉様は私のことをこれだけ思っていてくれた」

「フラン……」

「私、凄く幸せだよ！」

「……フランっ！」

レミリアはまたフランを抱きしめて、はなすもんかといった感じにギユウウウつと抱きしめる

「フラン！フラン！これからはずつと側にいましょうね、お話もしましょう、それにいあつぱい優しくするわ、今までできなかったぶん！」

「えへへ……お姉様、少し苦しいよお」

フランは今までよりも嬉しそうに、暖かい笑顔を浮かべてレミリアにされるがままになつていた

「フラン、さっきの答えだが」

「？」

「きみの能力は壊すだけじゃないよ・・・大事な者を守る力になることだってできる」

「！」

「そんな力あること、誇りにおもえばいい」

「壊す力が・・・守る力？」

「でも、どう使うかは君が見つけるんだ。私がどうこういつてみつけることじゃないからね。ゆっくりと探せばいい」

「・・・うん！」

レイがうんうんとうなずいてふと霊夢のほうをむくと、霊夢は少し口をとがらせ、顔をあからめていた

「ほら、霊夢もいうことあるならいつてしまえよ？」

「わっ、わかってるわよ！」

霊夢はレミリアの前に立つと、不機嫌そうに顔を背けて

「・・・さっきは言い過ぎたわ、ごめん。やっぱりあんたいいお姉ちゃんだわ」

レミリアは一瞬目を見開いて驚いた表情を浮かべるが、そのあとにフツツと表情をゆるめて「ありがとう」と霊夢に言った

「さて、全部終わった事だし、異変はとめてくれるよな？」

魔理沙は服についたほこりはらいながらレミリアに問いかける

「ええ、もう赤い霧は消したわ。これで異変は終わり、貴方達の勝ちよ」

私が空を見上げると、赤い霧は消えて、すがすがしい青空が天井の大穴からのぞいていた

「さて、わかってるでしょうけど明日の宴会、首謀者はお酒と肴を用意すること忘れないでよね」

「わかってるわ、特上のお酒と絶品の肴を用意させるわ」

霊夢は満足そうにうんうんとうなずくと、魔理沙がその横にたち

「んじゃあ、帰るか」

「そうね、疲れたし」

「服なおしてもらわないとなあ」

レイ達は各自様々な事を口にしながら飛び立つ

その様子を眺めていたレミリア達はあることを思い出す

「これどうするの?」

あたりを見渡すと、瓦礫、瓦礫。一体だれが直すというのだろうか?
「・・・明日までに間に合うかしら?」

咲夜は1人、クスンと縮こまるのだった